

○第十一圖 悉曇秘の表紙裏に記せるもの

證本概説

悉曇秘釋字記は、高野山寶壽院の所藏なり。前半は、明覺の述ぶるところ、後半は作者不明の寂深秘抄尺字を記したり。卷末に、承久三年五月四日、以上綱之御本書寫了、金剛佛子定尹とあり、而して其の表紙裏に本文と同筆にて此の圖を記せり。恐くは原本のまゝに寫せるものなるべし。又卷末に、次の第十二圖あり。



○第十二圖 同書卷末に見えたるもの

阿伊烏衣於	可枳久計古
左之須世楚	多知津天都
那爾奴禰乃	波比不倍保
和爲于惠遠	夜以由江與
羅利留禮呂	摩彌牟咩毛

○第十四圖 悉曇相傳に記されたるもの

證本概説

悉曇相傳は、東寺觀智院の所藏にして奥書に、

五音上下五十餘條口傳東禪院上人心運談矣

自宗遙聞禪定院闍梨定尊秘旨他門遠傳法生房上人教尋音韻

焉 寬海爲常隨末資記萬端一隅懷耻他見勿及外聞云々

爰某傳彼等秘旨雖然愚鈍問□□聞但非他人□只是爲成佛

得道也

建仁三年九月十八日

午刻書之

金剛佛子教不

とあり、原本を寫せる橋本氏云、奥書最後にあらで、以下尙數葉ありて、同筆に書けり、故に、或は建仁三年當時の書寫にあらざるかといへり。

唇	舌	舌	舌	舌
ハ カ ク	チ チ チ	カ カ カ	カ カ カ	カ カ カ
ハ カ ク	チ チ チ	カ カ カ	カ カ カ	カ カ カ
ハ カ ク	チ チ チ	カ カ カ	カ カ カ	カ カ カ
ハ カ ク	チ チ チ	カ カ カ	カ カ カ	カ カ カ

唇	舌	舌	舌	舌
ハ カ ク	チ チ チ	カ カ カ	カ カ カ	カ カ カ
ハ カ ク	チ チ チ	カ カ カ	カ カ カ	カ カ カ
ハ カ ク	チ チ チ	カ カ カ	カ カ カ	カ カ カ
ハ カ ク	チ チ チ	カ カ カ	カ カ カ	カ カ カ

○第十五圖 建仁四年具注曆の裏に寫せる反音抄に見えたるもの

證本概説

此の反音抄は、高山寺の舊藏にして、今は田中勘兵衛氏所藏なり。卷頭に此の圖を掲げ、各行毎音にアイウエオを配當して、漢吳二音の別を示したり。

シヨ○ホノ○ト○ヌ○マ

三十八

丑上○へ○子○し○チ○セ○ケ○エ

カ上ムク又ル○ヌクマ

井イ○ヒ○ニ○リ○チ○シ○ト○イ

いヤアハナラタサカカア

○第十七圖 古寫反音抄に擧げたるもの

證本概説

此の反音抄は、東京帝室博物館の所藏にして、其の序に
仍訪服虔沈約之秘術爲顯悉曇五音之要樞聊集先哲之細弄擬披後昆之朦昧而一
卷號曰正音義以筆難盡粹就圖弄早延悉之于時皇曆執徐之年青陽沽洗之候矣日
本國業遍照金剛乘 記之とあり。卷尾に建長八年十月十三日書寫了本云此書者
是悉曇字門之鉗鍵反語聲明之燈燭也。可謂優曇貫花之文藉易顯并結果之義理。口
學受更問可秘々々弘安七年九月五日於神尾山北谷祥光院以開田院御本奉寫了
とあり。

又訖之音有傳

為母第一為母第二是別聲聲也

五音

二与三与五相通 个工与日同故可合字又日也

又与五相通 凡用雙舌時之音字皆相通

又凡凡相通

台	台	台	台	台
𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎
𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎
𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎
𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎
𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎
𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎
𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎
𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎
𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎

以上五字本韻
已上中下准也

此五音與音也

已上五音與音臨
切韻等諸字下四

台	台	台	台	台
𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎
𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎
𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎
𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎
𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎
𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎
𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎
𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎
𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎

此五音與音也
已上五字本韻
為中才一時為中字故中
音韻也但上字非下無成
已上五字本韻
為中才一時為中字故
中音韻也但上字非下無成
已上五字本韻

五音頻連去次第
頻生ア作ハ空エツ
達主シエ工ハ作ハ

○第十八圖 悉曇字記明了房記に示せるもの

四十二

證本概説

悉曇字記明了房記は、東京帝國圖書館に藏せるものにして、其の音圖アヤワ三行のイレウチエエオチの混同せる状態、此の時代前後の諸圖と一致せるより見ても、明了房の自記たるや疑ふ可からず。然るに近代明了房五十音秘記といふもの出で、それは、明了房信範が、安然の傳を記し、ものなりといへるが、其の奥書に、

右五十音之一卷者阿覺尊者之傳雖深秘依所望令傳授者也堅可禁外見乎

文永九年壬申九月十日 明了房信範謹記

右比叡山大慈院文庫所藏

天保十二年九月九日 慈雲書寫

此一卷下總國佐倉城中にありて、即城主の秘藏なるを關根江山借得て寫しけるは、弘化四年丁未十二月十一日なるをまた借得て寫し畢、乙卯秋山

相陶

這書雖眞僞未詳頗似有所據故親膽寫之聊考訂紙繆畢

嘉永甲寅季春念八月夜 墨水 花押

とあり、此の墨水とあるは、黒川春村にして、稍疑ふところあるに似たり、或人は慈雲書寫の奥書あるを以て、慈雲の僞作なるべしと爲せれど、高楠文學博士は、慈雲の著書許多見通したる上にて、其の獨識卓見を以て、自ら許せるさまより推せば、決してさる卑劣の所行あるべくも思はれずといへり。尙此の明了房記を披くに及びて、同じく一人の手に出でたるものにして、一は、秘記の如く、嚴にイレウチ等を分別し、一は此の記の如く、之を混同せるが如きは、前後によりて、其の説の變ぜしものと見るも、其の記述の状態も相類しながら、其の用字句法を殊にせるは、大に疑ひを存せざるを得ず。又アワ二行のオチを混同することは、鎌倉以後の常態なるに、其の際に於いて、獨信範が、かくの如く分別せしは如何あらん。或は、それは信範が製したる音圖にあらで、安然のもの其のまゝに傳へたるものなればなりと言はんか、安然のものならんには、必ず眞假名圖にして、即ち第一圖の良源傳本と同じきものならざる可か

らず。されば假令、眞に安然が傳なりといふとも、其の眞假名圖によりて製したる片假名圖ならんには、必ず、曾て明覺が反音作法に於いて、其の眞假名圖を片假名もて記せるが如く、第十一圖なる密宗肝要抄の眞假名圖に附したる片假名と同様に眞假名の如何に拘らず、唯々、當時廣く用ゐられたる片假名もて譯せるのみにして、強ひて其の原字を省きて、一々新たに片假名を作るには及ぶまじきなり。然るに、此の秘記は、古來眞假名にても分別せしことなきア行のイと、ヤ行のレ、ア行のウと、ワ行の手を特に差異を示し、は、餘りに理窟めきて、更に其の時代に於ける前後の音圖と、實際に於ける口舌上の發音と融合す可からず。又悉曇の名匠信範にして、既に此の如き音圖を傳へたることあらば、其が下流を酌める音韻家中には、必ず此の音圖を承傳せるもの有るべきに、弘安の反音抄を始めとして、遙かに降りて、安永年間本居宣長の字音假名遣の出づるまでは、絶えてアワ二行のオヲすら、確かに分別せるもの無かりしは、其の理由解すべからず。是に於いて、編者は、以上の諸疑點を取り集めて、理由はそれと示さゞれど、黒川氏は眞偽未詳といひ、或人は慈雲が偽作なるべしといひ、高楠氏は、慈雲は、偽作などすべきものにあらずといへるなど、併せ考ふれ

ば、此の秘記の原本の、世間に知られて、果して其の古色の建長前後のものたるを徵すべきものあるに非るよりは、之を取りて確かに明了房の音圖として、此の處に序づべき値無きものなりと信ずるなり。但し、其の音圖は、秘記の初に、圖別紙とありて、其の書に見えざれど、關根江山の音韻假字格に擧げたる安然の五十音とあるは、即ち是なるべく思はるゝに、此の圖は、一時、人にも知られて、今の五十音のワ行の井を井と改められたるも、此の圖に基けるものなれば、特にこゝに擧ぐべし。

五十音

安然記

阿^ア 伊^イ 寫^ウ 衣^エ 於^オ 加^カ 喜^キ 久^ク 氣^キ 古^コ
 散^サ 氏^シ 須^ス 世^セ 曾^ソ 多^タ 知^チ 通^ツ 天^テ 止^ト
 奈^ナ 仁^ニ 奴^ヌ 祢^ネ 乃^ノ 半^ハ 比^ヒ 不^フ 反^ヘ 保^ホ
 末^メ 尾^ミ 牟^ム 妙^メ 毛^モ 也^ヤ 以^イ 遊^ユ 江^エ 與^ヨ
 良^ラ 利^リ 流^ル 礼^レ 呂^ロ 和^ワ 吾^ウ 宇^ウ 回^エ 乎^フ

今此の圖を見るに、強めて片假名の文字に、同字無らしめんとせしは、他の眞假名圖に同じけれど、成るべく訓字を少からしめんとし、殊に片假名の名に泥みて、強ひて全體のものなからしめんと苦心し、安然、當時に常に用ゐざる通反尾妙遊韋回を字原と見たるが如き、一も片假名の成立を解せざる所爲に出でたる、其の形跡蔽ふ可からず。是にて、益、秘記と共に、後人の偽作たることを暴露せるものと云ふべし。かく記せる後、次の第十九圖を得て、信範の音圖の大に秘記と異なることを明かにせり。

以アカサタ等、十音、配十界事附以五音配五根五識事

二	一	管
井	佛	絃
鬼	佛	義
訶	阿	十配私
韻聲	韻聲	界當次
カ	ア	
カ	ア	
身	身	
識	識	
キ	イ	
キ	イ	
身	眼	
識	識	
ク	ウ	
ク	ウ	
身	舌	
識	識	
ケ	エ	
ケ	エ	
身	鼻	
識	識	
コ	ヲ	
コ	ヲ	
身	耳	
識	識	

十	九	八	七	六	五	四	三
地	鬼	畜	修	人	天	聲	緣
人	天	地	修	井	緣	聲	畜
奈	多	羅	摩	婆	耶	沙	和
韻聲	韻聲	韻聲	韻聲	韻聲	韻聲	韻聲	韻聲
ナ	タ	ラ	マ	ハ	ヤ	サ	ワ
ナ	タ	ラ	マ	ハ	ヤ	サ	ワ
身	身	身	身	身	身	身	身
識	識	識	識	識	識	識	識
ニ	チ	リ	ミ	ヒ	イ	シ	キ
ニ	チ	リ	ミ	ヒ	イ	シ	キ
身	身	身	身	身	身	身	身
識	識	識	識	識	識	識	識
ヌ	ツ	ル	ム	フ	ユ	ス	ウ
ヌ	ツ	ル	ム	フ	ユ	ス	ウ
身	身	身	身	身	身	身	身
識	識	識	識	識	識	識	識
ネ	テ	レ	メ	ヘ	エ	セ	エ
ネ	テ	レ	メ	ヘ	エ	セ	エ
身	身	身	身	身	身	身	身
識	識	識	識	識	識	識	識
ノ	ト	ロ	モ	ホ	ヲ	ソ	ヲ
ノ	ト	ロ	モ	ホ	ヲ	ソ	ヲ
身	身	身	身	身	身	身	身
識	識	識	識	識	識	識	識

○第十九圖 悉曇輪略圖抄に見ゆるもの

證本概説

悉曇輪略圖抄は、高野山遍照光院の所藏にして、卷子本十卷なり。東京帝國大學梵語研究室にて借り受けたるものを、編者乞ひて閱覽し、尙其の寫眞圖を映寫し置けるなり。此の輪略圖抄は、其の序に、

爰先師信範上人、廣排五天字門、深搜悉曇奧藏、二七音通塞、殆拉十家群釋之解、三六章廢立、恐越三國祖師之義、終蒙明師之許可、永爲矇昧之法、近然予適入室中、而面受口決、幸陪座下、而親寫瓶水、仍爲備被公案、聊補此私記、分爲一部十卷、名曰輪略圖、但卷々立篇章段々、造圖弄略中于時、弘安滿數之歲、仲呂半闌、日泉州神於寺、隱者沙門了尊、不能欲罷、慙以類聚云爾。

とありて、信範が口授せるところを、弘安中之を補修して、卷を成せる趣なり。前圖と合考せば、信範が音圖の、全く安然記といふ音圖とは、隔絶せるものなるを覺るべし。

悉曇輪略圖抄卷第一 未再治
一聲字實相事

古	口	口
仔	阿	口
鬼	加	古
之	沙	古
千	多	古
二	奈	古
比	八	唇
三	末	唇
仔	也	口
利	良	古
并	和	唇
商	宮	

	唇	舌	唇
穢	ウツ 平 <small>イッ</small>	エ江 <small>エ</small>	宇 <small>ウ</small>
佛	シ古 <small>ゴ</small>	ク氣 <small>キ</small>	ク久 <small>ク</small>
善	シ廉 <small>レン</small>	セ世 <small>セ</small>	シ須 <small>ス</small>
聲	ツ都 <small>ト</small>	テ天 <small>テン</small>	ツ津 <small>ツ</small>
人	ス乃 <small>ノ</small>	ス子 <small>シ</small>	ス奴 <small>ヌ</small>
覺	フ保 <small>ホ</small>	フへ <small>ヘ</small>	フ布 <small>フ</small>
天	シ毛 <small>モ</small>	シ女 <small>メ</small>	シ牟 <small>ム</small>
餓	シ餘 <small>ヨ</small>	シ江 <small>カ</small>	シ由 <small>ユ</small>
鬼	シ呂 <small>ロ</small>	シ礼 <small>レ</small>	シ流 <small>リ</small>
修	シ於 <small>オ</small>	シ慧 <small>エ</small>	シ宇 <small>ウ</small>
羅			
重			
	利	穢	爾

○第二十圖 反音作法に附記せるもの
證本概説

此の反音作法は、第三圖の下に擧げたる田中本の反音作法をいへり、乃ち其の書の末に、其の本を書寫せる人の記入せるもの、如く、其の次に嘉曆三年六月廿五日於西郊院光明照院書寫了、金資勝空と記したり

多一タチウ千ト那一ナニヌ子ノ
加一カキクケコ摩一マミムメモ
作一サシスセソ波一ハヒフヘホ
昆一ウリルレロ和一口井ウエシ
耶一ヤイユヨ阿一パイウオ

○第廿一圖 倭片假字反切義解に出せるもの

證本概説

反切義解は、群書類從に收むるところにして、末に花山耕雲散人明魏愚草とあり、假字本末に、一本の奥書を擧げて、

右一册於難波速川氏家許借之、命筆染紙彼花山散人明魏字、耕雲自作和歌口傳則應永年中出家住山州花頂山焉、續作者部類卷下、曰、凡僧明魏花山院、流尹、大納言師賢卿、孫權中納言家賢卿子、名長親、南朝任權大納言新撰古今和歌集和歌六首亦新葉集載、右大將長親、詠歌有數首、蓋長親慕君至孝、長歌慣音於我朝遭親喪、凡三年居憂者、唯遠世貞觀年中紀、夏井也、近世正平年中藤長親耳、長親入道明魏、匪直也、人者也、于時正德三癸巳歲孟春八日以寧局今河如雜と記せり。

サ	シ	ス	セ	②	齒
カ	キ	ク	④	コ	牙
ヤ	イ	⑤	メ	モ	唇
ハ	ヒ	⑦	ハ	ホ	唇
ラ	⑩	⑪	⑫	ロ	半舌
タ	⑬	⑭	⑮	ト	舌本
ナ	⑯	⑰	⑱	ノ	舌末
⑲	⑳	㉑	㉒	ヨ	半喉
㉓	㉔	㉕	㉖	オ	喉閉
㉗	㉘	㉙	㉚	カ	喉開
喉宮	舌徵	唇角	牙商	齒羽	
腎腰	心胸	脾腹	行腹	肺臟	

○第廿二圖 二中歴中に載するところ

證本概説

二中歴は、前田家の所藏なるを、小杉博士の手寫せしものなり、全部十二冊其の譯言曆中、此の圖あり、二中歴とは、掌中歴と懷中歴との二部を合せたるものなり、即ち反音五音とある下に、手心とあるは、掌懷の二字を省けるなり、掌中歴は、續群書類從に收め、其の序文の前に、廟陵監朝請大夫竹下博士善爲康抄と誌したり。

反音五音 キ以アヲナカマサラハマツ 為次
心以アカタラサハナツマヤ 為次

アイウエシカキクケクサシスセソタチテフドロ
ヲミヌ子ノマユエヨコツ井ウエオハヒラハナマニシク

○第廿三圖 法華經音義に見えたるもの

證本概説

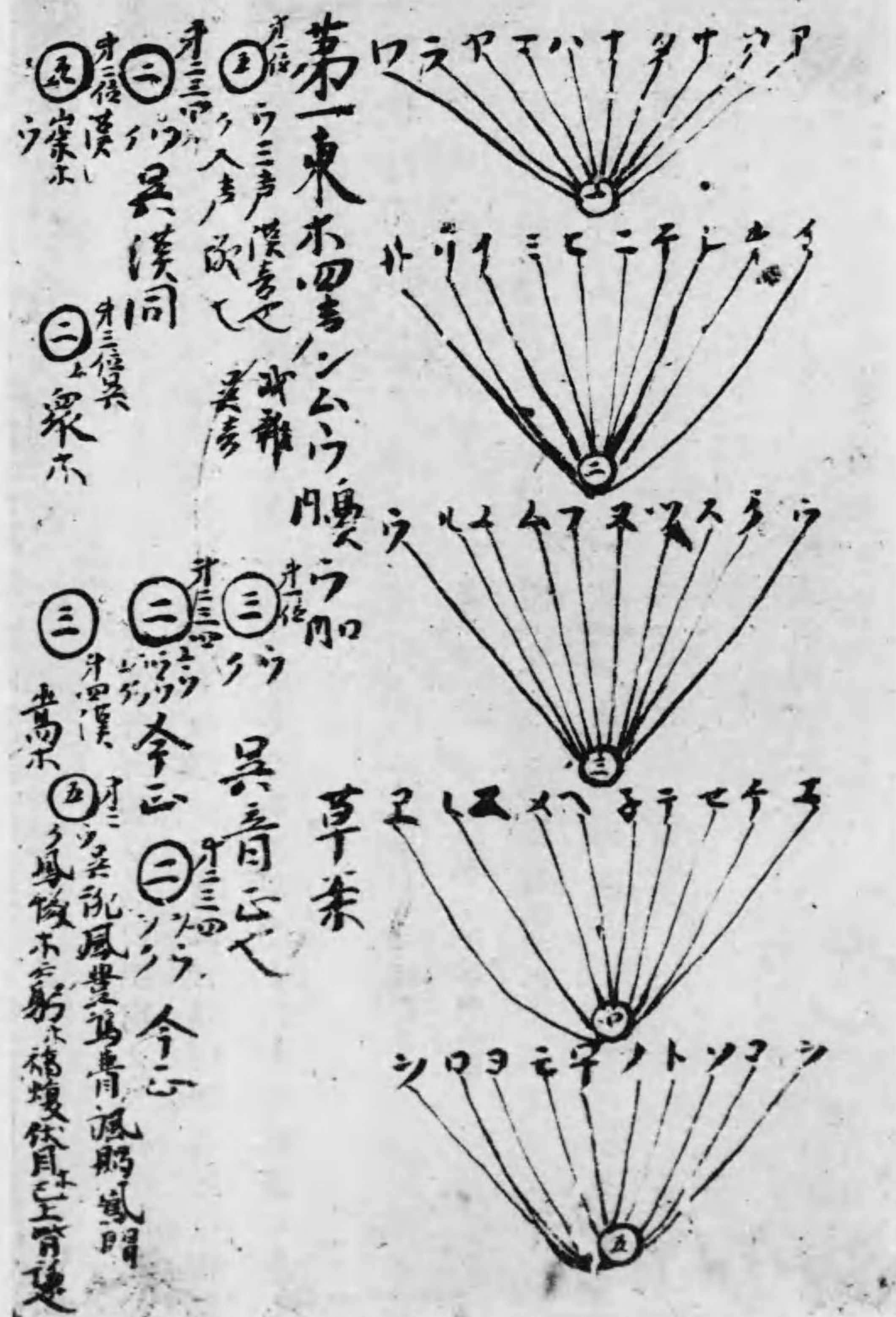
法華經音義上下二冊は、田中勘兵衛氏の所藏にして、法華經の單字千七百八十餘を、喉舌唇三内に類聚し、右音圖の次第に順ひて、吳音を示したる後に、此の音圖を擧げたるなり、音圖の次には、吳音漢音同異並反音變と題して、反音の法を説明し、末に天台智者大師の漢文にて書ける觀心誦經法と沙門心空の和とを擧げたり、和とは誦經法の和譯のよしにや、而してその上卷末に、

法華經音義上 永和四戊午正月十一日 初藤原光能 後沙門心空書

と見えて下卷末に無し、而して右の初後は、初篇即上卷後篇即下卷の事なるか、上卷の三内類聚が初にして、觀心法以下が後に有りや、明かならず、又初藤原光能、後沙門心空書とあるは、初後の書寫人を異にせしを言ふ如くなれど、上下共に一筆になれるを見れば、此の初は、以前の義にて、出家前は云々といひ、出家後は云々の意にて、もあらんか、但慶安の板本、上卷の末に比丘心空、貞治乙巳曆上春下澣之候於元應寺記之とあり、或は心空が貞治に書けるを、十二年後に後人の書寫せるにてもあらん。

○第廿四圖 古寫本韵鏡字相傳口授に見えたるもの
證本概説

此の字相傳は、文學博士大槻文彦氏の所藏にして、目次を合せて二十葉の一册なり。卷末に、應永卅年二月九日於敦賀氣比之社、頼勢御本、以是書寫中也。爲無上并之也。求法桑門實慶と記したり。卷首に左の圖を掲げ、圖後に一部分を見するが如く、二百六韻の次第を逐ひて漢吳音時に宋音をも注せり、中間に吳音漢音事といへる項に、悉曇末師有誤、其故、吳音漢音者代々音相代故云々是、大非也、八卷藏云、袁公金公來、教吳音後、正和尙聽和尙來、傳漢音、取此等皆唐代時日本承和前後比也、已吳音漢音有、于此時代々不改、實以可知況、我朝吳音多分用內典、是聖德太子以後、盛世太子當、隋時漢音多分用外典、來雖久、自吉備大臣相續、小野篁入唐、後殊盛也、又慈覺識法阿彌、隨經大師經疏禮儀等皆漢音也、此唐代傳、悉曇、記漢音者即是唐韵、云々故非代々改、問因八卷藏日本音三寶類聚和音者何、哉答吳音一徹、教定故分二、自其前、内外典漸來、或高麗百齊或吳楚燕冀等諸國、○○○等習傳、音○○何難定、故金公正和尙已前音名日本音略下など見えたり。



○第廿五圖 異本假名遣近道に記されたるもの

證本概説

此の假名遣近道は、伊勢林崎文庫本にして、故谷森善臣翁の手寫せるものによる。大體流布本に同じけれど、眞假名の伊呂波の次に擧げたる、此音圖阿和二行の於、遠の位置及び衣を依とせる處を以て、他に異なりとす。特に異本と稱して、此處に擧ぐ。

音連聲相通

阿伊烏依於口初三相通

可根久計古口一二三四五

在之須世楚ハマヤ相通

多知津天都舌上下二四相通

那爾奴祢乃舌上二五相通

波比不邊保唇橫相通

摩弥牟咩毛唇

夜以由江與喉

羅利留礼呂喉

和爲于惠遠喉

宮商角徵羽

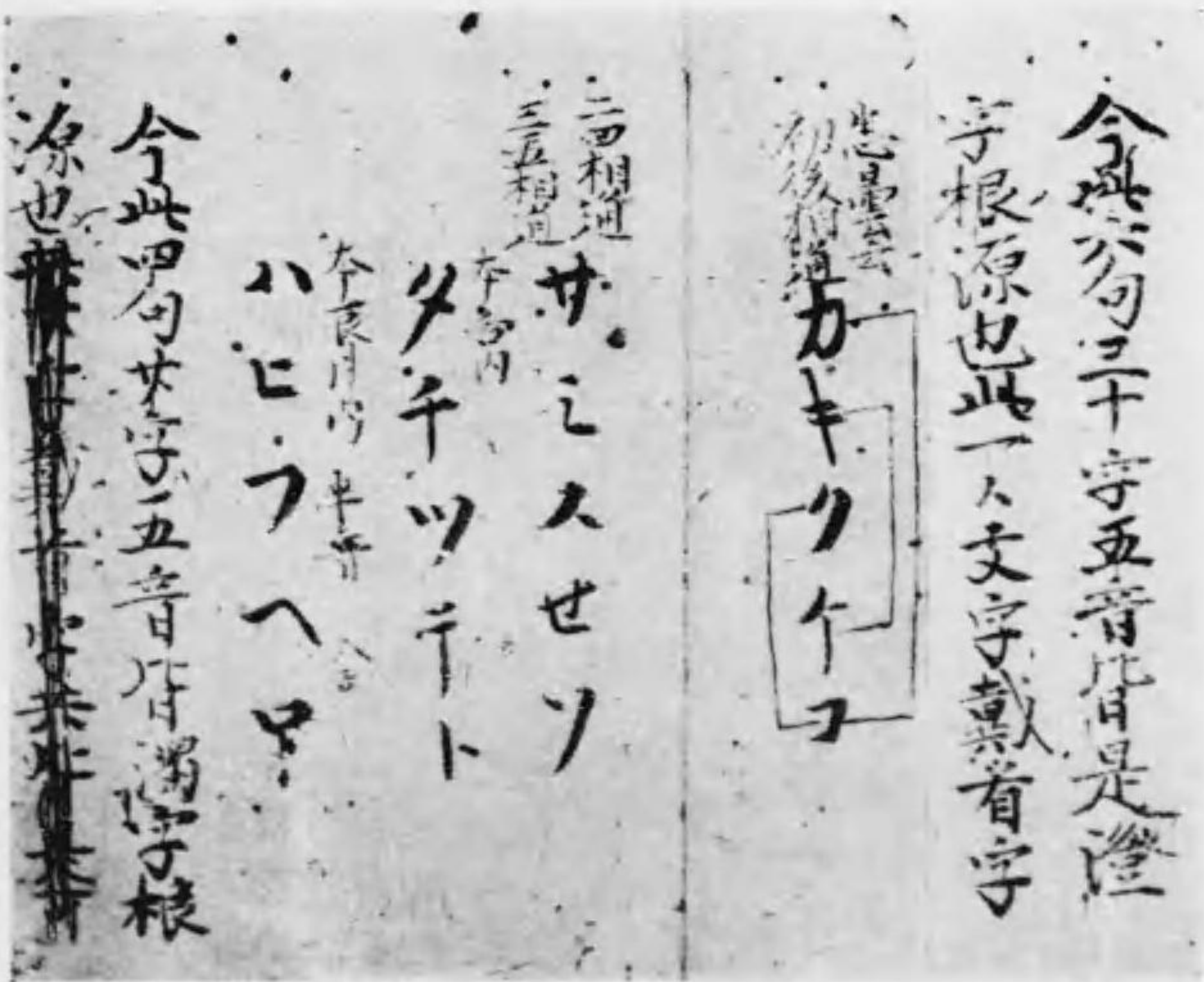
本座切 平上去入依下字輕重清濁依上字

自音讓佗

○第廿六圖 古寫本讀經口傳明鏡集に見ゆるもの

證本概説

讀經口傳明鏡集は、和田英松氏所藏にして、能譽といふが作なれど、其の年代詳かならず。然れども、連歌の懷紙を翻へして袋綴にせる其の中頃に、長祿元十二とあるに、よりて、それより以後に書けるものなること知るべきなり。



○第廿七圖 天文本倭名類聚抄卷首に記入せるもの

證本概説

此の天文本倭名抄といふは、所謂略本倭名抄にて、毎卷末に天文丙午、天誂某書之と記したるものなり。而して編者が見たるは、上野圖書館本にして、末卷に右天文本五册原係墨坂老侯挿架之本也、囑其家扶中島春雄謄寫、而其原本以俗本校古本、却失體面者有矣。
下略 明治十二年十月十五日、淑人稱佳園主源芳楚記印とあり、但し此の圖は序文と目錄との間伊呂波本篇第四章第二節六三頁の次に出でたり。

字切切與反同音取下字又行之中切取下切字
爲正字輕重濁依上字平上去入依下字

- 羅利留礼呂 摩弥牟咩毛 阿伊烏衣於
- 可积久計古 左之須世楚 多知津天都
- 那尔奴称乃 波比不倍保 和爲有惠遠
- 夜以由江與

○第廿八圖 寛永板韻鏡の首に出せるもの

證本概説

寛永板韻鏡は享祿中僧宗仲が宋板を訂正し、清原宣賢跋を書きて開板せるを寛永年間再板せしなり。其巻頭に、左の五音五位之次第を掲げたる所謂る假名反しに便せんとてなるべし。

第五次之位

ワ	ラ	ヤ	マ	ハ	ナ	タ	サ	カ	ア
ウイ	ルリ	ユイ	ムミ	フヒ	ヌニ	ツチ	スシ	クキ	ウイ
ゾ	ツヤ	ツヤ	ツヤ	ツヤ	ツヤ	ツヤ	ツヤ	ツヤ	ツヤ
イ	リ	イ	ミ	ヒ	ニ	チ	シ	キ	イ
ウイ	ルリ	ユイ	ムミ	フヒ	ヌニ	ツチ	スシ	クキ	ウイ
イ	イ	イ	イ	イ	イ	イ	イ	イ	イ
ウ	ル	ユ	ム	フ	ヌ	ツ	ス	ク	ウ
ウイ	ルリ	ユイ	ムミ	フヒ	ヌニ	ツチ	スシ	クキ	ウイ
ハ	ユウ	ウコ	ウエ	ウエ	ウエ	ウエ	ウエ	ウエ	ハ
エ	レ	エ	メ	ヘ	子	テ	セ	ケ	エ
ウイ	ルリ	ユイ	ムミ	フヒ	ヌニ	ツチ	スシ	クキ	ウイ
エ	エ	エ	エ	エ	エ	エ	エ	エ	エ
ヲ	ロ	ヨ	モ	ホ	ノ	ト	ソ	コ	ヲ
ウイ	ルリ	ユイ	ムミ	フヒ	ヌニ	ツチ	スシ	クキ	ウイ
ヲ	ヲ	ヲ	ヲ	ヲ	ヲ	ヲ	ヲ	ヲ	ヲ

○第廿九圖 和字正濫抄に示したるもの

證本概説

この圖は、契沖の和字正濫抄に示せるものにして、梵文に准へて作れるよしにいへり。同書は、元祿六年に著し、ものなり。

五十音 豎、各行、五音相通 横、各行、同韻相通

左	加	安	喉音 聲韻一体 諸音能生
左 左以切	加 加以切	以 省人	舌音 唯韻非聲 安所生
左 左寧切	加 加寧切	宇 省于	唇音 唯韻非聲 安所生
左 左江切	加 加江切	江 省工	末舌 唯韻非聲 以所生
左 左遠切	加 加遠切	遠 省表	末唇 唯韻非聲 宇所生
舌 兼本 以所生	喉 兼外 安所生	喉 内	初、一行、注ナリ

波 ^は	奈 ^な	太 ^た	和 ^わ	良 ^ら	也 ^や	未 ^ま
波 ^ひ 波以切	奈 ^に 奈以切	太 ^ち 太以切	和 ^る 和以切	良 ^り 良以切	也 ^い 也以切	未 ^み 未以切
學 ^ふ 波字切	奈 ^ぬ 奈字切	太 ^つ 太字切	和 ^う 和字切	良 ^る 良字切	也 ^ゆ 也字切	未 ^む 未字切
波 ^へ 波江切	奈 ^ね 奈江切	太 ^て 大江切	和 ^系 和江切	良 ^れ 良江切	也 ^に 也江切	未 ^め 未江切
波 ^は 波遠切	奈 ^な 奈遠切	太 ^と 太遠切	和 ^わ 和遠切	良 ^ら 良遠切	也 ^や 也遠切	未 ^ま 未遠切
唇 ^内 輕 字所生	舌 ^末 兼鼻 以所生	舌 ^中 以所生	喉 ^卷 適口 字所生	舌 ^卷 適口 以所生	舌 ^兼 適口 以所生	喉 ^外 兼牙 字所生

○第三十圖 和字解に擧げたるもの

證本概説

和字解は、貝原益軒が假名遣のことを書けるものにして、元祿十二年の作なり、同書には、此の圖を縦の相通とし、猶次に横の相通として、あかさたな云々の圖を擧げた

わがうたを
らりわたり
あはれを
はひふり
たあしを
かきへけ
あふり

○第卅一圖 和字大觀鈔に擧げたるもの

證本概説

和字大觀抄は、僧文雄の作にして、假名遣、假名文字の種類、五十音、いろはの事より反切等、大略假名に關する種々なることを何くれとなく説き明せるものなり。寶曆四年に、一たび刊行し、寛政七年に補削して、再び世に出せり。

日本音韻開合假字反圖

サ	カ	ア	開
スシ ソヤ	クキ ソヤ	ウイ ソヤ	開合
シ	キ	イ	合
スシ キイ	クキ キイ	ウイ キイ	開合
ス	ク	ウ	合
スシ ウユ	クキ ウユ	ウイ ウユ	開合
セ	ケ	エ	合
スシ エエ	クキ エエ	ウイ エエ	開合
ソ	コ	チ	合
スシ オヨ	クキ オヨ	ウイ オヨ	開合
合開	合開	合開	
齒	牙	喉	
		淺開	

フ	ワ	ラ	ヤ	マ	ハ	ナ	タ
フ	ウキ ソヤ	ルリ ソヤ	ユイ ソヤ	ムミ ソヤ	フヒ ソヤ	スフ ソヤ	ツア ソヤ
フ	ヒ	リ	イ	ミ	ヒ	ニ	チ
フ	ウキ キヤ	ルリ キイ	ユイ キイ	ムミ キイ	フヒ キイ	スニ キイ	ツチ キイ
フ	フ	ル	ユ	ム	フ	ヌ	ツ
フ	ウキ ウユ	ルリ ウユ	ユイ ウユ	ムミ ウユ	フヒ ウユ	スニ ウユ	ツチ ウユ
フ	フ	レ	エ	メ	ヘ	ネ	テ
フ	ウキ エエ	ルリ エエ	ユイ エエ	ムミ エエ	フヒ エエ	スニ エエ	ツチ エエ
フ	オ	ロ	ヨ	モ	ホ	ノ	ト
フ	ウキ オヨ	ルリ オヨ	ユイ オヨ	ムミ オヨ	フヒ オヨ	スニ オヨ	ツチ オヨ
合開	合開	合開	合開	合開	合開	合開	合開
齒	喉	舌	喉	重唇	輕唇	舌	舌
齒		舌齒				齒舌	
合開	深合		淺開				

○第卅二圖 語意考に擧げたるもの

證本概説

語意考は、加茂眞淵の、明和六年の著にして、我が國に、五十音の成れる所以、そが國語の活用と關係あることを述べたるものなり。而して、之に擧げたる五十音圖は、山城國、稻荷の祠官の家に、其の一部分を傳へたるによりて、其の師、荷田東萬呂の古言を考へ、又は人に説き示す爲に用ゐたるものなるよし、自序に見えたり。此の原圖のままならざることは、平田氏の古史本辭經に、彼の荷田の家に傳はれる圖は、其の古説の添ひたる上は、當昔の古圖にて、伊以韋宇于延曳惠於袁十音の位置も正しく在りけんを、破失せて、其のあと少か存りしは、最惜しき事なるが、今懇懇に按ふに、略本和名抄の始に出されたる音圖、決めて其の古圖の類なるべく所思なりといへるが如くなるべし。今此圖のみによりて見るときは、延衣遠於の位置の違へる、門反の文字の殆ど之を用ゐたる實例なきが如き、怪しむべき點あればなり。

五十聯音 伊門良乃
古惠と調

阿	伊	宇	延	袁	本音
加	幾	久	計	已	音濁
佐	志	須	世	曾	同
多	知	門	天	登	同
奈	仁	奴	彌	乃	音濁
波	比	不	反	保	音濁
麻	美	武	米	毛	音濁
也	伊	由	衣	與	同
良	利	留	例	呂	音濁
和	爲	宇	惠	於	音濁
初	體	用	令	助	

こはしめの
ことば
ことば
ことば
ことば
ことば
ことば
ことば
ことば
ことば
ことば

○第卅三圖 あゆひ抄に記せるもの

證本概説

あゆひ抄は、北邊成章の説を、門生吉川彦富井上義胤といふが、安永二年に識しゝものゝ由、おほむね下とある末に見えたり、而して、此の音圖は、其の中に見えたるところにして、其の下に、

世にたてぬきのことわりをしらぬ人、あたてのおもじを、わたてにおき、わたてのおもじを、あたてにおくは、あやまれり。師説たてぬきの辨あり。とあり。たてぬきの辨ありとあれど、未だ見ざれば、其の理由は知らざれど、蓋し韻鏡によりて、影喩二母の分別を知り、又は、古言の同音通用の上より考へて、かくいへるなるべし。本居氏が、オナの位置を正したる字音假字用格の世に出でたるより、二年の前なれば、鎌倉以後、オヲの位置の混じたるを、古言の同音通用の例より推して、舊圖を正したるものゝ先駆といひつべし。

經緯圖

わ	ら	や	ま	そ	か	た	さ	か	あ	あ	あ	あ	あ
わ	ら	や	ま	そ	か	た	さ	か	あ	あ	あ	あ	あ
ら	る	い	み	ひ	か	ち	し	き	い	あ	あ	あ	あ
る	る	ゆ	む	ふ	ぬ	つ	せ	く	う	あ	あ	あ	あ
あ	る	え	め	へ	ぬ	て	せ	け	え	あ	あ	あ	あ
を	ら	よ	を	か	乃	と	を	こ	に	あ	あ	あ	あ
わ	ら	や	ま	そ	か	た	さ	か	あ	あ	あ	あ	あ
ら	る	い	み	ひ	か	ち	し	き	い	あ	あ	あ	あ
あ	る	え	め	へ	ぬ	つ	せ	く	う	あ	あ	あ	あ
を	ら	よ	を	か	乃	と	を	こ	に	あ	あ	あ	あ

○第卅四圖 漢字三音考に記されたるもの

證本概説

漢字三音考は、本居宣長の著にして、安永四年に成れる字音假字用格に先ちて稿を脱したるが、少しく後れて、天明五年に、發行せられたるよしなり、而して、オチの位置は、用字格のおを所屬辨の章に於いて、明確に論定せられたり。

- | | | | | | | | | | | |
|-----|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 第一音 | ア | カ | サ | タ | ナ | ハ | マ | ヤ | ラ | ワ |
| 第二音 | イ | キ | シ | チ | ニ | ヒ | ミ | イ | リ | キ |
| 第三音 | ウ | ク | ス | ツ | ヌ | フ | ム | ユ | ル | ウ |
| 第四音 | エ | ケ | セ | テ | 子 | ヘ | メ | エ | レ | エ |
| 第五音 | オ | コ | ソ | ト | ノ | ホ | モ | ヨ | ロ | チ |

○第卅五圖 古史本辭經に改訂せられたるもの

證本概説

此の書は、平田篤胤の著にして、國語は總へて二音を主幹として、是に種々の語の加りて、國語の全部を成せるものなり、而して其の主幹は古事記の序なる諸家之所費、帝紀及本辭云々の本辭のことなりと爲し、乃ち五十音に、語の下につきては意を爲さざるア行を省き、カ行以下四十五音を之に加へて、二百二十五言を得、之に一音一義なる五十音を加へて、二百七十五言と爲して、一々解説を述べたるものなり、即ち此の圖は、天文本和名抄の首に記されたる、前の第廿七圖を以て和名抄當時に、古來傳はれる古圖の記されたるものとなし、其の中の訓假名、又は、紀記等の古典に見慣れざるものを改め、なとして、圖中の眞假名を定め、之に平田氏の神代文字なりと信ぜし所の朝鮮諺文を取りて、之に當て、以て此の圖は製せしなるべし。

初宮	ト	唯韻	非
體徵	イ	唯韻	非
啓用	ウ	唯韻	非
角合	エ	唯韻	非
令商	オ	唯韻	非
拓助	イ	唯韻	非
羽撮	ウ	唯韻	非
經行	エ	唯韻	非
音相	オ	唯韻	非
通	イ	唯韻	非
通	ウ	唯韻	非
通	エ	唯韻	非
通	オ	唯韻	非
成喉音	イ	唯韻	非
成喉音	ウ	唯韻	非
成喉音	エ	唯韻	非
成喉音	オ	唯韻	非

音圖及手習詞歌考索引

圖正訂音十五

	コ	オ	エ	ウ	ヅ	ツ	ハ	ク
天津	カ ^ラ	カ ^ラ	カ ^ラ	カ ^ラ	カ ^ラ	カ ^ラ	カ ^ラ	カ ^ラ
良	和	夜	麻	波	那	多	佐	加
初	初	初	初	初	初	初	初	初
總	稚	壯	滿	含	成	立	進	極
天八	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ
衢	理	章	以	美	比	爾	知	伎
定	定	定	定	定	定	定	定	定
總	稚	壯	滿	含	成	立	進	極
顯	ル	ル	ル	ル	ル	ル	ル	ル
固	流	于	由	牟	布	奴	都	須
用	用	用	用	用	用	用	用	用
總	稚	壯	滿	含	成	立	進	極
泉	レ	レ	レ	レ	レ	レ	レ	レ
平	禮	惠	曳	米	閉	禰	氏	世
坂	令	令	令	令	令	令	令	令
總	稚	壯	滿	含	成	立	進	極
泉	ル	ル	ル	ル	ル	ル	ル	ル
津	呂	袁	余	毛	保	能	登	曾
固	終	終	終	終	終	終	終	終
總	稚	壯	滿	含	成	立	進	極
弄	稚	壯	脣	脣	舌	舌	顎	顎
舌	喉	喉	外	內	柔	剛	柔	剛
音	音	音	重	輕	兼	純	兼	純

上欄見出索引

ア之部

阿女都千の名の見えたる古書類 三
 阿女都千知に對する伴信友の説 四
 順集あめつちの歌四十八首 三
 阿女都知に對する榊原芳野の説 四
 阿女都千のユリは硫黄なり 四
 阿女都千の遠く天略以上に行はれたる證據 四
 阿女都千の行體なりし推測 五
 阿女都千の功績 五
 アヤ二行のエの分別一覽表 一三五
 イ、キ之部

伊呂波字類抄の伊呂波分けの伊呂波 六
 伊呂波和雜集の伊呂波分けの伊呂波 六
 伊呂波を以て空海の作なりと云ふこと大江匡房の頃までは不審なりしが如し 六
 伊呂波の空海の作ならざる證あるも尙舊説を固執するものある理由 六
 伊呂波作者に對する説の眞偽を明かにするの方針 七
 伊呂波製作の理由 八
 伊呂波の歌式 八
 伊呂波字の字源 八
 韻鏡内外轉と古今注五十音聲位との一致 一七
 伊呂波字原の類別 八
 伊呂波字中の周代古音 八
 伊呂波の末に京字を附する始 八

伊呂歌の意義 六
 伊呂波の説法 九
 伊呂波歌を七字に切れば其行末トガナクテシスの七字となるにての利用 九
 伊呂波歌を空海の作なることを主張せる伴信友の論 九
 伊呂波の空海の作ならざる第二證 一三
 伊呂波は空海の作ならざる第三證 一三
 伊呂波歌は空海の作ならざる三證以外の諸證 一四
 伊呂波歌は空海の作ならざる所定 一四
 伊呂波歌ノ天慶ヨリ永觀マデニ成レル推測 一五
 伊呂波歌の作られたる時代の推定 一七
 ウ之部
 運歩色葉集の以呂伴 七
 宇都保物語手本のこと 一三
 宇都保の歌不明なる辭を改削す 一三

宇都保時代未だ伊呂波無かりし推 斷	一四二	かたかな	一三	元人の伊呂波の説	七一
エ、エ之部		キ之部		コ之部	
悦目抄伊呂波	六	京字に對する諸説	六	五十音圖の本来の目的	三
延暦二十四年の童謡	九	京字によりて伊呂波作者を推定の 説	六	五十音圖と國語との關係	三
オ、ヲ之部		教化	一〇三	五十音圖と言靈家	三
音圖上エエ、オヲ、を分別せる時 代の限界	七	ク之部		五十音圖の種類及び構成	八
音圖豎横位の異同の類別	八	口遊に阿女都千の名の見えたるさ ま	三	五十音と悉曇との豎横位の一致	九
音圖製作時代の斷定	六	口遊作者	五	五十音豎位の理由	一四
男手女手の別	五	口遊・大爲爾歌の縮臨	五	五十音は吉備大臣の作と云説	一五
尾張演主の歌	九	黒川本源平盛衰記	七	五十音圖の眞價	三〇
女手	一三	空海時代の歌謡と伊呂波歌との比 較	七	古言衣延辨	三九
カ之部		空和海讃の作者	一〇二	古代なにはづあさかやまを手習ひ し所以	五
片假名は吉備公の作に非る理由	六	空海時代の草假名表	二二	金光明最勝王經音義の伊呂波	六
片假字ヲ伊呂八といふこと	七	ケ之部		金光明最勝王經音義の伊呂波の縮 臨	六
河海抄伊呂波作者の説	七			江談伊呂波の説	六
				極樂往生歌のイロハの縮摹	六

極樂往生歌、伊呂波の音冠	六	悉曇輪略抄の伊呂八	七	チ之部	
極樂往生歌の寫眞	六	悉曇輪略抄の伊呂八の寫眞	七	貞觀九年大屬有年の假名文寫眞	一三
高野日記のいろはのこと	七	慈鎮拾玉集の今様	八	ツ之部	
興福寺大律師等が獻れる長歌	一〇	承和二年の童謡	九	徒然草のいろは	七
五七調の七五調となれる理由	二二	舍利讃歎	一〇一	つ字に對する字原の數説	八
サ之部		七五四句一章單行の和讃と其の長 篇との行はれたる時代の前後	二七	テ之部	
佐藤誠實翁と谷森善臣翁との援助	三	四十八音時代	二七	天朝墨談	六〇
相摸集あめつち十六首	三	性雲集序	一三〇	天文本和名抄の卷首の伊呂波	六三
讚歎類字句數の異論	一〇九	字母弘三乘・眞言演四句と説四 句演・毘尼と共に伊呂波の事に あらず	一三	天祿以前伊呂歌存在の跡無し	一三九
シ之部		眞の手	一三五	ト之部	
豎位の不同	四	タ之部		トガナクテシスの意義	九七
悉曇音譯時代と中古以後の發音の 不同	三	大爲爾歌	五	ノ之部	
十一個の眞假名圖の文字の異同	三〇	大爲爾歌の讀方	五	信友の説に服せざる論者の駁論	一三〇
慈覺の在唐記中悉曇字母集	三〇	大爲爾歌の意譯	五	信友が宇都保の歌を曲解せるを怪 しむ	一三八
諸先哲の五十音を過重せる状態	三三	大爲爾歌の考證上の益	五		
順集あめつちの歌四十八首	三三	多羅葉記伊呂波分けの伊呂波	六		
釋日本紀開題の伊呂波の説	三三				

宇都保時代未だ伊呂波無かりし推
断 一四二

エ、ヱ之部

悦目抄伊呂波 六四
延暦二十四年の童謡 九

オ、ヲ之部

音圖上エエ、オヲ、を分別せる時
代の限界 七

音圖豎横位の異同の類別 八

音圖製作時代の断定 六

男手女手の別 五

尾張濱主の歌 九

女手 一三

カ之部

片假名は吉備公の作に非る理由 一八
片假字ヲ伊呂八といふこと 七〇
河海抄伊呂波作者の説 七三

かたかな 一六

キ之部

京字に對する諸説 六
京字によりて伊呂波作者を推定の
説 六
教化 一〇三

ク之部

口遊に阿女都千の名の見えたるさ
ま 三
口遊作者 五
口遊・大爲爾歌の縮臨 五
黒川本源平盛衰記 七
空海時代の歌謡と伊呂波歌との比
較 一〇一
空也和讃の作者 二二
空海時代の草假名表 二九

ケ之部

元人の伊呂波の説 七

コ之部

五十音圖の本来の目的 三
五十音圖と國語との關係 三
五十音圖と言靈家 三
五十音圖の種類及び構成 八
五十音と悉曇との豎横位の一致 九
五十音豎位異同と其の理由 一四
五十音は吉備大臣の作と云説 一五
五十音圖の眞價 一七
古言衣延辨 三〇
古代なにはづあさかやまを手習ひ
し所以 三
金光明最勝王經音義の伊呂波 五
金光明最勝王經音義の伊呂波の縮
臨 六
江談伊呂波の説 六
極樂往生歌のイロハの縮摹 六

極樂往生歌、伊呂波の香冠 六

極樂往生歌の寫眞 七

高野日記のいろはのこと 七

興福寺大律師等が獻れる長歌 一〇〇

五七調の七五調となれる理由 二二

サ之部

佐藤誠實翁と谷森善臣翁との援助 三
相摸集あめつち十六首 三七
讚歎類字句數の異論 一〇九

シ之部

豎位の不同 四
悉曇音譯時代と中古以後の發音の
不同 二

十一個の眞假名圖の文字の異同 二〇

慈覺の在唐記中悉曇字母集 二七

諸先哲の五十音を過重せる状態 三

順集あめつちの歌四十八首 三

釋日本紀開題の伊呂波の説 六

悉曇輪略抄の伊呂八 七〇

悉曇輪略抄の伊呂八の寫眞 七〇

慈鎮拾玉集の今様 八

承和二年の童謡 九

舍利讚歎 一〇一

七五四句一章單行の和讃と其の長
篇との行はれたる時代の前後 二七

四十八音時代 一四

性雲集序 一〇

字母弘三乗一眞言演四句と説四
句演毘尼と共に伊呂波の事に
あらず 一三

眞の手 一三五

タ之部

大爲爾歌 五
大爲爾歌の讀方 五
大爲爾歌の意譯 五
大爲爾歌の考證上の益 五
多羅葉記伊呂波分けの伊呂波 六

チ之部

貞觀九年大屬有年の假名文寫眞 一三

ツ之部

徒然草のいろは 七
つ字に對する字原の數説 八

テ之部

天朝墨談 四〇
天文本和名抄の卷首の伊呂波 三
天祿以前伊呂波存在の跡無し 一三

ト之部

トガナクテシスの意義 九

ノ之部

信友の説に服せざる論者の駁論 一〇
信友が宇都保の歌を曲解せるを怪
しむ 一三

<p>ヒ之部</p> <p>百石讚嘆 一〇三</p> <p>百石讚歎の蟲芥集と三寶繪と字句の差異 一〇六</p> <p>百石讚歎の作者 一〇七</p> <p>百石讚歎の百石はモ、サカと讀むべき説 一一〇</p> <p>ヘ之部</p> <p>平家物語の今様 一〇九</p> <p>平群賀是麻呂の歌 九六</p> <p>ホ之部</p> <p>寶龜元年の童謡 九六</p> <p>法華讚嘆 一〇三</p> <p>マ之部</p> <p>眞假名圖上文字の異同 一〇八</p> <p>眞假名圖中より抜粹せる六古圖 一一二</p>	<p>眞假名の下圖は一原圖より出でたる推測 三三</p> <p>五十音原圖の暗推 三三</p> <p>天曆以上眞假名片假名のア行のエを衣又はラと書きマ行のエを江若くはエと書く實例 三五</p> <p>五十音の眞言宗より出でたりといふ説 三五</p> <p>五十音の天臺宗より出でたる説 三六</p> <p>眞假名伊呂波文字の比較 三七</p> <p>ミ之部</p> <p>密嚴諸秘釋なる以呂波歌 三五</p> <p>彌陀和讃の千觀の作なる證 一三三</p> <p>源順及び爲憲のアヤ二行のエを分別せざりし證 一三三</p> <p>ヤ之部</p> <p>倭片假反切義解の伊呂波説 一三三</p>	<p>リ之部</p> <p>凌雲集中の詩句 一三九</p> <p>ワ之部</p> <p>横位異同の比較 一〇六</p> <p>横位の異同 一〇五</p> <p>和讃の前身讚嘆教化の類 一〇一</p> <p>和名抄口遊の時代即天祿永觀前後の假名遣の狀態 一〇一</p>
--	--	---

索引終

大正七年八月一日印刷
大正七年八月四日發行

音圖及手習詞歌考與附

定價 貳圓



發行所

大日本圖書株式會社

東京市京橋區銀座一丁目廿二番地

編輯者 大矢透
東京府北豐島郡高田村大字雜司ヶ谷九三六番地

發行所 大日本圖書株式會社
東京市京橋區銀座一丁目廿二番地

印刷者 中西彦三郎
東京市小石川區久堅町一〇八番地

印刷所 博文館印刷所
東京市小石川區久堅町一〇八番地

郵便振替貯金口座 東京 二一九番

終